

ナルキッソス及びヘルメスとしてのクルル

—『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』—

三 枝 圭 作

(1992年6月22日受理)

はじめに

トーマス・マンがフロイトの『ナルシズム入門』を読んだのは、1925年にフロイトの著作集が出たときだと推定される。したがって、マンの『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』（以下『告白』と略す）の「子供時代の巻」の執筆は、1910年から1913年にかけての時期であったとされているので、この巻においてはフロイトの影響は考えられない。にもかかわらず、ここではフロイト理論との共通点がみられる。このことはマンの『告白』が、彼が後に読んだフロイトの理論によって裏付けされていることを物語っている。以下、『告白』におけるナルシズムを中心に考察する。

1

トーマス・マンの描く主人公たちのなかで、何らかの形でナルキッソスの面影を備えているものは多い。トーマス・ブデンプロークやハンス・カストルプをはじめ、『道化者』の主人公や若きヨゼフにみられる *Selbstgefälligkeit* ないし *Selbstliebe* は容易に指適できる。なかでも、ヴェニスのリドで、老作家グスタフ・アシェンバハを恍惚とさせるポーランドの美少年タドゥツィオは、ナルキッソスでもって描写されている。

それは水に映った自分の姿の方へ屈み込むナルキッソスの微笑であった。われとわが美しい影に腕を差しのべる、あの深刻な、うっとりした、誘い寄せられたような微笑であった。ほんの少し苦汁を交えたあの微笑であった。というのもつまり自分の影のやさしい唇に接吻するという望みはないからなのだ。なまめいて物珍しげな、かすかに苦痛の色を浮べた、うっとりとした、人の心をまどわせる微笑であった。(VIII-498)¹⁾

フェーリクス・クルルはどうであろうか。彼もまたこの「ナルキッソスの微笑」で周囲を魅了する。クルルも澄んだ水に映る自分への恋に燃える羊飼いの少年にほかならない。クルルは自分の少年時代を回想して次のように語る。

とにかく、己は、自分が同輩たちよりももっと高貴な素材でできている、あるいはよく人が言うように、もっと良質の木で刻みあげられた人間だということに気づかずにはいなかったのであって、自惚れだと非難する人がいるかもしれないが、己はこう言いきってはばからないのである。そこいらの誰彼が自惚れだと言おうが言うまいが、それは己には全くどうでもいいことで、もし己が、自分は十把一からげに数えられるような安っぽい人間にすぎないなどと言うとしたら、己は低能か偽善者でなければなるまい。(VII-273)

また、後になってヴェノスタ侯爵との「役割交換」(Rollentausch)によって狂喜したクルルは、こみあげてくる喜びを次のように述べている。

理解ある読者諸君、己はほんとうに幸福だった。己は己自身が貴重な者に思え、己がいとしかった——もちろんこのいとしみ方は、自分自身に対する愛を外に向け他人に対する好意に転化させる、あの社会的に意義のあるいとしみ方だった。(VII-523)

2

この引用にみられるように、クルルがヴェノスタ侯爵との「役割交換」であれほど狂喜したのはなぜか。その秘密は、神話の少年が単なる牧者にすぎなかったように、彼の全く平凡な血統にあった。

しかし全体として己は血統に多くを負っていないと確信しないわけにはいかなかった。そして、もし己が、己の一族の歴史にはどこか知らないがある時点において、秘密な規則以外の因子がまぎれこんでいて、戸籍にとらわれずに見た場合、己の先祖のなかには廷臣とか貴頭とかがいるとしなければならないというふうに想像したくなければ、己の長所美点の起源を明らかにするためには、自分の内部に思いをひそめるよりほかはなかった。(VII-329)

「役割交換」がこのようなクルルの血統の欠陥を補ってくれるや、彼のナルシズムは完成される。調子に乗ったクルルは、にせ侯爵としてポルトガル国王に謁見中に、この世の階級の存在の重要性

をのべたてて、さすがの国王をも啞然とさせている。彼はまず「尊い生れという恵み」(VII-609)から始めて次のように語る。

急進派と自称する分子………彼らは………民衆の健全な本能を破壊し、仕組み正しい社会秩序の必然性に対する生まれながらの確信を民衆から奪いとって民衆を不幸におとし入れる点においてのみ、彼らは民衆とかかわりをもつのでございます。………彼らは民衆の頭のなかにもまったく不自然な、したがって民衆には縁のないあの平等の理念を植えつけ、家柄、血統の差異、貧富、貴賤の懸隔を除去することは必然である………などと………平凡な弁舌によって民衆に妄想を抱かせます。ところが、彼らが除去しようとするその差異、懸隔を永遠に維持すべく、自然は美と結びついております。(VII-610)

しかし国王は、にせ侯爵クルルのこの世辞を若者の「無邪気」(Unschuld)とはみなしても、残念ながらそのナルシズムには気づいていないのである。

3

ここでクルルのナルシズムをみてみよう。彼は徴兵検査の際、検査場にしつらえられた仕切りのなかで、一人になってシャツを脱いだとき、自分のエリート意識を挑発される。「自然がわれわれを生み出した状態、つまり裸体は、平等化するもので、裸の人間の間にはもはや位階も不公平もあり得ない」(VII-355 f)という世の常識に反撥する。

この主張は、たちまち己の憤怒と反抗とを目ざめさせたが、賤民には媚びへつらうもので、彼らには受けいられるのかもしれない。しかし、これはいささかも真実ではない。人はおそらくこの主張を訂正して、正真正銘の位階は生まれたままの状態においてこそはじめて設けることができる、裸体は人類の、本来不公平な、貴族的なものに好意が寄せられている状態を明らかにするという意味でのみ公平なものと呼ぶべきものである、ということができよう。(VII-356)

小さいときから、クルルは「日曜日に生まれた幸運児」(VII-271)だと家族の口から言い聞かされてきたが、自分でも「天の寵児」(VII-271)、つまり「創造的な力の寵児であり、まさしく特製の肉と血とでできた人間である」(VII-309)と確信している。この子供は「王様になって遊ぶのが好き」(VII-271)で、「今日カールという名の18歳の王子になろうと決心すると」(VII-272)、そ

の日一日じゅう「自足的な……想像力」(VII-272)を楽しむのであった。後の彼の犯罪行為も、「なにはともあれ、己の行為であって、そんじょそこらの有象無象の行為ではない」(VII-309)という「自惚れ」(VII-272)となる。少年時代のある日、ヴィースバーデンでの観劇の際に、平土間の観衆の「愚かしい忘我状態」(VII-290)を笑い、後年パリで、連れのクロアチア人、スタンコと見物に出かけて行ったサーカスの特別夜間大興行に際しても、彼はまわりの「貪るように眺めている群衆」(VII-456)を嘲笑する。スタンコといえば、同じホテルで働くクルルの同僚であるが、クルルの「自惚れ」はこのスタンコにも向けられている。

彼はかなりごろつきめいていて、国籍不明の感があった。それよりは、白い仕事着を着て、頭にコックであることを示す高い麻の帽子をのせているほうが、スタンコには確かに似合っていた。つまり働く階層は——街を行く市民を手本にしたりして——「流行を追う」べきではなかろう。気どってみても泥臭さが目立つばかりで、それで容姿のひき立つわけがない。(VII-454)

以上のようなクルルの Auserwähltheitsdenken は、自分の「優雅で人好きのする肉体」(VII-271)にも向けられる。彼は自分の Wohlgestaltheit を強調する。

すでに、芸術家である己の名付親シンメルプレスターの鑑定眼を満足させていた己の体格は、決して逞しいというのではなかったが、四肢も筋肉もすべて、普通はスポーツや身体を鍛錬して柔軟にする遊戯の愛好者にのみ見られるような、均斉のとれた模範的発達をしていた (VII-328)

パリで、初対面のスタンコにクルルは「お前はかわいい顔をしている」(VII-401)と言われるが、彼の自分の肉体への賛美は続く。

金髪に琥珀の肌、光沢のある碧い眼、口元につつましい微笑、声の、ヴェールでも透したような、かすかに囁れた魅力、左で分け、ほどよい高さにして後ろへなでつけた髪の毛の絹のようなきらめき、これらすべてを持っていた己は、……愛すべき存在と見えたにちがいない。……さらに記しておかなければならないのは己の皮膚のことで、これは異常に傷みやすく、きわめて感じやすかったから、……上質の石けんを使うように気をつけなければならなかった。(VII-328)

髪は「絹のように柔らかい金髪」(VII-273)で、「下等な男の手とは違う己の忙しく動く手」(VII-473)は、「細すぎもせず、格好もよく、決して汗ばむこともなく、ほどよく温で、かわいており、優雅な爪」(VII-273)がついている。その声にいたっては、「耳にこころよい響き」(VII-273)、「耳にこころよい声」(VII-325)、「己の声のこころよい響き」(VII-329)、「気持のいい声」(VII-437)となる。彼の *Selbstliebe* は、自分の「文体の清純」(VII-323)や「さっぱりとして好ましい筆蹟」(VII-265)から、次のような「衣裳の才能」(VII-284)にまで及ぶ。

いずれの場合にも、己は本来その服装を運命をもって生まれてきたかのように思われ、鏡もまたそれを保証したのであり、また、いずれの場合にも、みんなの判断によれば、己がそのとき代表している範ちゅうの典型的な例を示したからだった。そればかりか己の名付親は、己の顔が、衣裳や髪をつけると、その階級や風土のみならず、それぞれの時代にまでふさわしくなるように見えることを指摘した (VII-285)

後に、にせ侯爵たるクルルが、クックック教授の娘ズーズーによって、彼の *Selbstgefälligkeit* を非難されるや、むきになって反論する。

お嬢さん、本当にあなたは意地がお悪い。容貌がまともだと、その罰に、美しいものに感嘆する権利を奪われなければならないのでしょうか。(VII-591)

イギリス貴族キルマノック卿の「他人を肯定する能力」(VII-483)としての「自己否定」(*Selbstverneinung*)という考え方に反対して、クルルが次のように述べる時、クルルのナルシズムは頂点に達する。

「自己否定とおっしゃいますが」と己は低い声で言った。「卿、誰しもそういうお考えには承服も同感もできません。きっと強い反論をお受け遊ばすでしょう」(VII-482)

4

内なる一つの声が、人と交わり、友情をかわし、心情をあたためるような仲間をつくることは己の本領ではない、己はただ一人、己自身を頼みにして、かたくなに狷介な態度をまもりつつ、あくまでも己の特別な行路をすすみ続けるのでなければならぬと、はやくから己に告げていた。(VII-372)

ここには、フランクフルト時代、その雑沓のなかで、意識的に孤独に生きようとするクルルの生活信条の一端が表現されている。これはどういうことなのか。孤独こそは、ナルキッソスが支拂わなければならない代償だったのである。クルルの孤独もナルシズムと不可分である。「孤独のうちに成長しながら」(VII-273)、彼の「夢想的な実験や思索は、あの小都市の、もっとありふれた遊びに熱中していた同じ年ごろの子供や学校友達から、己を精神的に孤立させた」(VII-276)が、後年のパリ暮らしとなっても事情は変わらない。

世間というか上流社会というか、そういったものに対する己の内的な態度は矛盾だらけと言わざるを得ない。上流社会とあたたく気心をかよわせたい欲求は十分に持っていたのに、その己の心のなかに慎重な冷静さ、言ってみれば、見くびったような観察をしたがる気持が生じて、それが当人の己を驚かした。(VII-491)

クルルの異性関係も孤立である。そこでは一時的な性的関係はあっても、それが持続的な愛情には至らない。彼は自分の家の小間使の女ゲノフェーフアとの最初の性的出会いにおいて、自分の存在の「孤立状態」(VII-312)を回想している。この点でも、クルルは神話のナルキッソスと似ている。少年ナルキッソスは山のニンフ、エコーの恋をしりぞけるが、アプロディテの怒るところとなり、孤独な自己愛に陥るのである。

ところで、このようなクルルの自己愛と孤立は、他者の無関心と離反を招き、「自分自身に対する愛を外に向け他人に対する好意に転化させる」(VII-523)というクルルの信念と矛盾しないのだろうか。この問題については精神分析学が見事に説明してくれる。

ある人間のナルシズムが、自己のナルシズムを最大限に放棄して対象愛を得ようと努力している別の人々の心を大きく引きつけるということは、はっきりと認められるように思われる。子供の持っている魅力の大部分は、その子供のナルシズム、自己満足及び近づきがたさに基いている。²⁾

フロイトはここで、クルルのナルシズムが社会的孤立には至らないことを裏付けている。しかし、冒頭でも触れたように、少なくとも『告白』の「子供時代の巻」の執筆時においては、マンのあざかり知らぬところであった。この時点では、マンはフロイト理論の先取りをしていたことになる。したがって、マンはフロイトの学問によって、後に裏付けられるという光栄に浴するわけであるが、彼はフロイトによって全く満足させられているわけではない。むしろ、自分の小ささと、芸術家がフロイトの理論によって、エックス線をあてられるような不安を感じるという意味のことを述

べている。³⁾

5

フロイトによれば、ナルシズムは自他未分化の幼児段階の1次的ナルシズムと、自己愛と対象愛とが分離する段階の2次的ナルシズムとに区分される。この分離の不調和の結果が自己破壊であり、それは初期幼児段階のナルシズムへの自閉症的退行現象となって現れる。神話の少年ナルキッソスはこれによって破滅するのである。

ここでクルルの場合をみてみよう。マンは、「『告白』の最も早い先駆けである」⁴⁾『道化者』のなかで述べている。

不幸というものはただひとつしかないのである。それは自己に対する好意を失うことだ。自分がもはや気に入らぬというのが不幸なのである。(VIII-138)

『道化者』の主人公は、自己愛の生活を送ったあげくに、自己破壊とはいえないまでも、うえのような自己嫌悪に陥っている。ナルシス的人間であるこの主人公にあっては、自己愛と自己嫌悪とが表裏一体をなしているのである。しかしながら、他人につねに賞讃され、愛されるクルルの場合、彼は自己嫌悪とはほとんど無縁であり、それはマンの他の諸人物にくらべて極めて希薄である。このことはまた、クルルの生涯克服されることのなかった幼児性、自閉症的無邪気さと無関係ではあるまい。ハンス・ヴィースリングの言うように、クルルには子供から大人への移行がみられない。彼はあらゆる点で子供のままであり、「生涯を通じて子供のような夢想家であった」(VII-315)からである。また、この点に関しては、クルルの「明朗性」(Heiterkeit)によるところも大きい。これについては次章でも触れる。

このように、クルルの自己愛は決して自己破壊に至ることはない。クルルにとって自己愛とは、「自分が所有していると考えた高い優越、実体的な高貴性、危険な抜擢の神秘によせられた素朴にして高貴なる関心」(IX-69)であるが故に、彼は回想録、つまり自叙伝の執筆に没頭することになる。

自己愛はまたあらゆる自叙伝の始まりだと付け加えられよう。自分の生活を固定させ、その成行きを記録し、その運命を文学的に讃美し、同時代と後代とのこれに対する関心を情熱的に要求する人間的衝動は、自我感情の非凡な活潑さを前提とするからである。この活潑さこそは、あの賢明な言葉のとおり、ある生涯を「小説的」にする。(IX-69)

6

ナルキッソスとともにヘルメスもクルルの存在様式を表す神である。クルルは、自分がエレベーターボーイとして働いているパリのホテルで、ウプレ夫人との情事を楽しむが、その最中に彼女はクルルに向かって叫ぶ。

おお、神様。お前はほんとに美しい。りんとしてやわらかな、翳もない、惚れぼれするような胸、すんなりとのびた腕、愛らしい肋骨、ひきしまった腰、そして、ああ、ヘルメスの足……… (VII-444)

しかし、クルルは「自分がヘルメスでありながら、ヘルメスが何ものか知らない」(VII-448)。そこで彼女は、「言ってあげるわね、かわいいお馬鹿さん、ヘルメスが何ものなのか。ヘルメスは泥棒たちの、お口の上手な神様」(VII-444)と言うのである。

ヘルメスは、狡猾さやすばしこい頭の働きなどによって、商業者、交易通商、その他すべての蓄財の道あるいは物を盗む技術、泥棒やすり詐欺犯、収賄者などの守り神とされる。しかし、彼はこのような悪がしこい相貌ばかりでなく、一方では、かのオリュンピアにある世に有名なヘルメス神像の優雅さにおいても知られている。

ギリシアの神のこの二重造形が、DoppelnaturとしてのクルルのHochstaplertumと Wohlgestaltheitにおいていろいろな形で現れていることはいうまでもない。彼は詐欺師にして、Götterkindでもあるのである。しかも、後者のGötterlieblingとしてのクルルにみられる「明朗性」については、マンの『「ファウストゥス博士」の成立』のなかに、「冗談と真面目との彼岸という意味での、現実克服という意味での明朗性ということ」(XI-159)という記述があるが、この「明朗性」によって、仕事と規律、絶えざる精神的緊張に疲れはてているアシェンバハの反対像としてのクルル像が成立するのである。クルルにはもはや「認識の嘔吐」(Erkenntnisekel)は存在せず、すべての苦悩は明るい微笑のなかに消されてしまう。

『詐欺師フェーリクス・クルルの告白——回想録の第1部』は、ゲーテの『ファウスト』の如く、トーマス・マンの最後の長編小説として書きあげられた。前章で述べたように、自己愛は自叙伝の始まりであって、ナルシストのクルルは自分の自叙伝を書くのだが、これはクルルの自叙伝であると同時にマンの自叙伝でもある。フェーリクス・クルルは、ハノー・ブデンプローク、「認識の嘔吐」に顔をゆがめているトーニオ・クレーゲル、若きヨゼフ、『道化者』の主人公などの、明るくこっけいにゆがめられた形での反対像である。しかし、ヘルメスの生れかわり、つまり Doppelnaturとしてのクルルは、これらすべての主人公たちの像でもあるのである。そして、クルルをはじめ、

彼らはすべてマンの分身であり、自画像である。

注

- 1) トーマス・マンの著作の底本としては下記を用い、本文中の引用（訳文）にはその巻数とページを（VIII-498）の形で記した。
Thomas Mann : Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt am Main 1974.
なお、マンの作品からの引用については、邦訳（「トーマス・マン全集」新潮社 1972年）の訳文を借用している。
- 2) Sigmund Freud, Zur Einführung in den Narzißmus, in : Ders., Gesammelte Schriften, Leipzig, Wien, Zürich 1925, VI. Bd., S.271.
- 3) Interview mit Thomas Mann : „Die Krise des deutschen Romans“, in : „Hamburger Fremdenblatt“, 6.6. 1925 — Thomas-Mann-Archiv der ETH Zürich.
- 4) K. シュレーター : 「トーマス・マン」(理想社) S.203.

